吹田市立博物館

博物館だより

NO. 11

SUITA CITY MUSEUM

菊花散双雀鏡（蔵人遺跡出土）

平成10年度特別陳列

『榎坂郷蔵人村の日々－中世村落の考古学－』

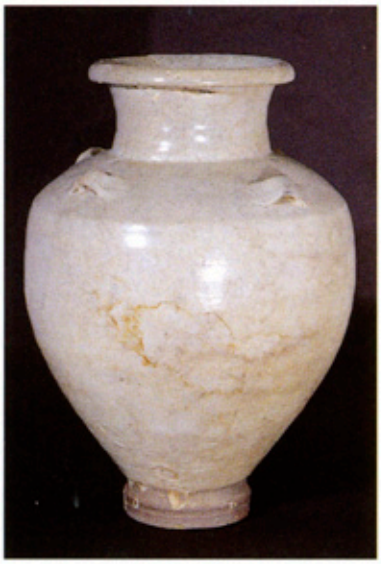
平成10年10月24日（土）～12月6日（日）

榎坂郷蔵人村。現在は近代的なビル群となり、市内でも最も繁華な街のひとつとして賑わう江坂のやや西方の地に、今から約700年前、その村はありました。「蔵人村」という名前は、応永10年(1403)の「春日社領榎坂郷名主百姓等申状案」(東寺百合文書・国宝）に「(前略）近比垂水庄号蔵人村成荒庄、土民百姓等最少也、将亦無田畠正体（後略)」とあるものが現存する記録のなかでは最も古いものです。この記述からわかるように、蔵人村は、弘仁3年（812）に東寺に施入された荘園である垂水荘内の集落でした。

集落の場所と変遷については、室町時代の康永2年（1343）、至徳3年（1386）、寛正4年（1463）の3回にわたって作成された検注帳（土地台帳）によって知ることができます。屋敷地・寺院・田・畠・荒地・河川・池などの位置と面積が具（つぶさ）に記されており、垂水荘内の土地利用の状況が鮮やかにわかるのです。康永2年の検注帳をみれば、垂水荘域の北端、豊嶋郡条里の坪付でいうと4条1里26坪から同2里12坪にかけて（現在の豊津町付近）、25筆の屋敷地が集中してあります。この集落が蔵人村です。4条1里27坪には円隆寺があり、その南に接する34坪には寛正4年に政所屋敷が出現しており、このあたりが村落の中心であったのでしょう。歴史学の成果では、この集落は鎌倉時代初め頃、千里丘陵裾部沿いに居住していた榎坂郷の農民が、鎌倉時代後半になってその出作地に定住して形成したといわれ、蔵人村は屋敷地が孤立分散的な散村から、寺社をともなった屋敷群としてまとまりをみせる集村へと移行する中世村落の典型として高く評価されています。

井戸（蔵人遺跡）

さて、蔵人村の故地にあたる江坂町2・3丁目から豊津町のあたりには、弥生時代から室町時代にかけての複合集落遺跡である蔵人遺跡があります。遺跡の発見は昭和36年（1961）の



岡本山古墳群出土白磁四耳壺
（高槻市立埋蔵文化財調査センター保管）

名神高速道路建設工事がきっかけですが、この遺跡が初めて発掘調査されたのは昭和52年（1977）のことです。この調査では中世の井戸9基を検出しましたが、そのうちの1基が鎌倉時代前半のものであったことから、文献で知られる蔵人村の起源よりも遡る時期に何らかの農民家屋が当地に存在したと推測され、蔵人村の実態解明に向けての一歩を踏み出すこととなりました。

以来、平成9年度までに21次にわたる調査を重ね、特に中世期については、掘立柱建物・井戸・鍛冶工房・石組み溝・耕作地・池・河道などの遺構が検出されており、地下に埋もれていた集落の姿が甦りました。遺物には瓦器椀、土師器皿、甕、羽釜といった日常生活に使用された土器のほか、青白磁、漆器、箸、火鉢、下駄、刀子、石硯、宋銭、和鏡、遊具、瓦など多種多様なものがあり、鎌倉～室町時代の村落生活の一端を知ることができます。これら蔵人遺跡の遺構や遺物はまさに中世「蔵人村」に生きた人々が遺したものであり、考古学のみならず、歴史学や歴史地理学に及ぶ中世村落研究を可能にする貴重な資料なのです。

今回の特別陳列は、蔵人遺跡をはじめとし、「垂庄」墨書土器が出土し、垂水荘立荘時における東寺の積極的な開発の様子がうかがえる垂水南遺跡（垂水町3丁目）、豊嶋郡条里の東限を確認した豊嶋郡条里遺跡（泉町2丁目）など市内の古代～中世の遺跡の発掘調査成果を紹介し、さらに近畿地方を中心とする周辺地域の荘園や村落の遺跡の出土品も交えて展示し、中世の村の様相を考古学によって考えてみようとするものです。平安時代以降の吹田は西国と京とを結ぶ水運の要衝として発展し、皇室、貴族、有力寺社の荘園が数多く設けられた地でもあります。こうした荘園の経営を支えた民衆の生活の息吹を、この展覧会を通じて感じていただければ幸いです。

玉津田中遺跡出土資料
（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所所蔵）

キリシタン墓碑にのこる二支十字

吹田市立博物館では、平成10年4月29日から5月31日まで、平成10年度特別展「高山右近とその時代 －北摂のキリシタン文化－」を開催しました。この展示では、キリスト教布教に努めた高山右近と彼と関わりの深い北摂の武将たちを紹介し、北摂から発見されたキリシタン遺物を展示しました。この特別展で紹介したキリシタン墓碑（写真参照）に刻まれた二支十字について考察したいと思います。

一般に、キリスト教の十字架というと「†」のかたちを思い浮かべるのではないでしょうか。ところが、十字架には多くの種類があり、『カトリック大辞典』（上智大学編　富山房　1940年）には24種類あげられています。「†」はラテン十字（横木が、縦木より短く、縦木の中央より上部で交差しているもの）と呼ばれるものです。十字は、ラテン十字とギリシア十字（「＋」型、横木と縦木が等長で、中央で交差するもの）が基本形として、これらが変形、装飾されて多くの十字架が考案されていったものと考えられます。

茨木市から発見されたキリシタン墓碑は6基ありますが、二支十字（「干」型、ラテン十字の頭頂部分に短い横棒のついたもの、名称は『茨木市史』（茨木市　1969年）に従った）の刻まれた墓碑は3基、他の3基はギリシャ十字が刻まれています。この二支十字は何を表しているのでしょうか。大神家所蔵の象牙彫キリスト磔刑像、神戸市立博物館所蔵のフランシスコ・ザビエル画像の中に描かれたキリスト磔刑像などいずれも十字架上部に「INRI」と書かれた板があります。これは「ユダヤの王、ナザレのイエス」（Iesous Nazarenus Rex Iudaeorun）という意味です。二支十字の頭頂の横棒はこの板を表しているものと考えられます。聖書には、逮捕されたイエスがローマ総督ピラトの尋問を受け、ユダヤ人たちによって「この人物はユダヤの王を僭称するナザレのイエスである」との罪状を頭上に掲げられたことが記されています。イエス・キリストが磔にされ

キリシタン墓碑拓本
（東藤嗣氏所蔵）

象牙彫キリスト磔刑像
（大神敏治氏所蔵）

た十字架はラテン十字架またはT字型十字架だったと考えられています。これに先述の罪状書をつけたのでしょう。

もともと十字架は古代地中海地域で見られた処刑具で、ローマではそのありさまが残酷なことから、磔刑は奴隷や重罪人に対して行われました。イエス・キリストも大罪人として処刑されたのです。コンスタンティヌス1世（大帝）はキリスト教を公認し、337年磔刑を禁止しました。キリストが処刑されてから4世紀頃まで、キリスト教徒の間では十字が暗号として用いられていましたが、こののち十字架は公然と信仰の証しとして用いられるようになりました。

二支十字は京都や九州など他の地域のキリシタン墓碑にも認められます。あらたな二支十字の例として注目されるのが、最近発見された高槻のキリシタン墓です。当館での特別展終了の直後に高槻城三の丸跡から高山右近治世下のキリシタン墓が発見され、26基の木製の棺と人骨が発掘されたという報道がありました。この中の一つの木棺のふたに二支十字が墨書（ぼくしょ）されていたのです。これは縦木10cm、短横木2.5cm、長横木8cmで、横木の右下に墨点があります。埋葬された日や洗礼名などは何も書かれていませんでした。この遺跡は、キリシタン墓としては国内最古のものと考えられ、高山右近の布教活動の成果を示すものとして貴重です。このように、キリシタン墓碑や棺に二支十字が使われていたことがわかるのですが、なぜ特にこの二支十字が使われたのかはよくわかりません。日本に現存するキリシタン墓碑には、二支十字のほかギリシア十字・花十字がよく使用されますが、イエズス会の紋章を使用している例もあります。キリスト教を最初に日本に伝えたフランシスコ・ザビエルはイエズス会の宣教師であり、高山右近が高槻城主であったころは、主にイエズス会の宣教師たちが日本で布教しており、イエズス会で用いられたものであったのかもしれません。

高槻城三の丸跡出土木棺ふた
（高槻市立
埋蔵文化財調査センター保管）

韓国の瓦づくりを訪ねて

── 大韓民国重要無形文化財第９１号　韓　亨俊氏の瓦工房 ──

大韓民国の西南部は、現在の行政区画では全羅南道に属していますが、三国時代では百済国に属し、わが国とは政治・経済、そして文化的にも多くの交流をもった国です。特に寺院や宮殿の屋根を飾った瓦は、６世紀末にこの百済国から伝えられました。難波宮や平安宮の瓦を大量に生産し、古代の瓦作りの最先端にあった吹田としては、この百済国はこころと技術の故郷ともいえます。ここでは、平成９年１２月１２日に、古代の瓦作りを今に伝える、韓　亨俊（ハン　キョンスン）氏の瓦工房を訪ねた記録をもとに、古い技法を現在に伝える韓国の瓦作りの姿を紹介します。

釜山広域市から東へ行くこと約２００㎞の内陸部に、全羅南道の中心都市である光州市があります。ここからバスを乗り継いで南下すること約１時間半で長興という小さな町に着きます。ここからさらにタクシーで約３０分で、安良面茅嶺里という村落があり、目的の瓦工場は、村外れのまだ朝霞の残る日差しのなかに、ひっそりとたたずんでいました。

突然の訪問であるにもかかわらず、韓　亨俊氏は、私たちに会うために工場まで駆けつけて来られました。氏は、１９２９年１月５日のお生まれで、現在７０歳。１９８８年８月に韓国の重要無形文化財の第91号「製瓦匠」として指定され、伝統的な瓦作りを今に伝える技術保持者として重要な役割をはたしておられます。韓国では国立文化財研究所の芸能民俗研究室が、同氏の詳細な調査を実施し、立派な報告書を刊行するとともに、９０分の詳細な映像記録も作成されています。一人の瓦工に対して、道具や製作・焼成記録をこれほど詳細に調査して公表されたことは、我が国でもわずかな例しかありません。

韓　亨俊瓦工場の瓦製作棟

街道に面した瓦工房には、藁葺き土壁の倉庫１棟と藁葺き藁壁の瓦製作棟が１棟あり、窯として達磨窯が１基ありま

す。窯と建物の間には広い空間があり、そこは瓦を天日干しなどするための空地で、いかにも瓦屋的な風景です。瓦製作棟は吹き抜け構造の簡易な建物ですが、そこを覗くと先ず驚かされるのが、機械といえるものは何一つなく、まさに古代の瓦屋そのものの風景なのです。建物の北側には粘土をこねる船場があり、奥には、瓦の原料の粘土を寸法どおりに切った「タタラ」が寝かされており、このようなものは我が国ではすでに土練機（土をねる機械）が導入された昭和初期から、遅くとも戦後まもなくにかけて、ほとんど失われてしまったものです。

さらにその奥には、丸瓦の製作用具があり、その横には、平瓦の最も伝統的な製作手法を残す「桶を乗せたロクロ」が一基、地中から立っていました。古代の瓦はロクロの上に桶を乗せ、桶に布を被せてその上に粘土を巻き、円筒状の粘土製品を造り、それを乾燥させたものを４分割して、一枚の平瓦を造ってゆくのです。この技法を「桶巻き造り」といい、瓦の凹面に布目が残ることから、古代瓦は「布目瓦」と呼ばれているのです。このロクロは、吹田市の吉志部瓦窯跡の発掘調査で、検出したロクロピットと同じ手法で設置されており、正しく、１２００年前と寸分変わらない技術が生きているのです。

窯は典型的な「達磨窯」で、中央に焼成室、その左右両側に燃焼室を設けて双方から焚く基本構造は日本のものと同じですが、全長６.５ ｍ、幅は約３.３ ｍ、１窯あたりの瓦の焼成量は平均１,３００ 枚とされ、かなり大型です。達磨窯は、韓国の遺跡発掘例では見出すことができません。この窯はむしろ我が国の近世以降に発展した独特の窯で、おそらく明治末頃に日本から韓国に持ち込まれただろうということを、わたしたちは昨年の当館の特別展「達磨窯」において主張しました。韓国の達磨窯のビデオ記録をみると、火を着けてからアブリ・ホンダキ・イブシ・フカシ・トメの基本的な工程は我が国の達磨窯と変わりませんが、よくみると、大正時代以降に、東海や近畿地方などで採用された新技術がみられず、韓国の焼き方は明治時

韓　亨俊氏の達磨窯

代の古い技法を踏襲（とうしゅう）しているか、それ以外の別の系譜のようにみれるのです。また、同氏はこれは日本の瓦窯技術であることを明白に証言され、瓦を焼く韓国の技術者の口から、初めてわれわれの推定通りの証言が得られました。

この窯はいまから５４年前に築造されたと同氏の記憶にあります。現存最古の達磨窯は、愛知・三重県下で残されている約７０年前のものですが、いずれも廃窯となっています。達磨窯は世界中でも日本と韓国しかないとみられ、操業中の達磨窯では、群馬県藤岡瓦の共和建材有限会社の達磨窯が２２年前と古いのですが、韓亨俊瓦窯はそれより３０年も古く、現在も操業している達磨窯のなかでは、「世界で最も古い達磨窯」とみられます。これはもしかすると、燻瓦（いぶしがわら）生産に関しては、「世界的な文化遺産」ではないでしょうか。

平瓦を製作するロクロ

講演会・展示解説　日時案内

● 11月1日（日）午後2時
テーマ「中世の村を歩く　－垂水荘と蔵人村－」
講　師　大阪府文化財調査研究センター
鋤柄　俊夫氏

● 11月15日（日）午後2時
当館学芸員による展示解説

講演会会場は吹田市立博物館２階講座室。聴講無料で先着順（１２０名）です。なお、展示解説は３階特別展示室で行いますので、観覧料が必要となります。

■交通案内
ＪＲ岸辺駅下車徒歩20分
ＪＲ吹田駅・阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分
千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス「岸部」下車徒歩10分
阪急南千里駅からＪＲ吹田ゆきバス②、③系統「佐井寺北」下車徒歩10分

吹田市立博物館だより　第11号
平成10年10月1日発行
吹田市立博物館
〒564-0001 吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL. (06) 338-5500　FAX. (06) 338-9886

R70
古紙配合率70%再生紙を使用しています
白色度は70%です